



梶尾(つがお)

昭和49年秋、宮崎大学の卒業を間近にしていたぼくと佐治研究室の同僚、蔵藤君、奥田君とは宮崎青年奉仕協会の若い仲間たちの活動に参加していた。定期的な活動は週に1回か2回だったか孤児たちのいる施設に行つて勉強を教えたり一緒に遊ぶというものだった。

冬も近づいたある時、ぼくと蔵藤君とは青年奉仕協会の企画した梶尾(つがお)小学校訪問に参加した。僻地の学校を訪れて子供たちと交流しようというものだった。訪問団は車の数だけのグループに別れた。宮大生のぼくと蔵藤君は小型トラックに二人だけで乗り、宮崎から山間地の梶尾村に向かった。ぼくは運転しないので彼がハンドルを握った。久しぶりに運転できることとなった彼は有頂天だった。途中車中でぼくら二人は冗談話をし、いくつかの歌の練習をした。井上陽水の「白いカーネーション」が今回の交流のテーマ曲として選ばれていた。

数日前に下見に行った人たちによると梶尾小学校のある山は雪が降つて少々積もり始めていたとのことだった。もしまだ雪が解けていなければ車を降りて小学校までの登り道を歩かなくてはならない。ぼくらは軽装だったが、車で運んでいるみんなの毛布や荷物を持って上がるのは大変である。

途中のガソリンスタンドで我々キャラバン隊の車はみな満タンにした。山道に入ってから前を行く中型車の左後部から、車がバンプするたびに透明の液体がさらっとした感じで道に落ちるのが見えた。そしてぼくらがそこを通るときにはもうガソリンの臭いが鼻をついた。

「あっ、ガソリンこぼしている」

「ほんと、ガソリンの臭いだよこれは」

「きっと、さっきのガソリンスタンドで油入れた時、栓をきつく締めなかったんだ。」

山道は舗装しているとはいえ起伏が多く先行車は大きく揺れたりカーブを切るたびにさらさらした透明のガソリンを左右にまき散らした。蔵藤君は警笛を鳴らして知らせようとした。しかし前の車の連中がやっと気がついて車を止めるまでには2キロくらいは走っていたであろう。調べてみると確かにオイルタンクの栓が緩んでいてそこからガソリンが車の振動するたびに噴き出していたのだった。

やがて舗装道が終わり砂利道に入ったとき蔵藤君はスピードをあまり落とさないうまま進んだので、前の車を追い越し先頭に出た。先は一本道だから道に迷う心配はない。しかし、崖道でハンド

ルを砂利にとられ、車は陸に上がった魚のように左右に尻を振った。車を運転しないぼくにとってはちょっとした愉快的ジョークのようだったが、運転技術を心得ている蔵藤君にとっては心臓の止まる思いのするアクシデントだったらしい。

梅尾小学校は山間部にありいくつかの村落の子供たちが登校してくる。ひどい雨が降ったり雪が積もったりすると大変だろう。幸いぼくたちがやって来た時には雪はすでに解けていて、道もぬかるみはほとんどなくなっていた。ただ寒さは厳しく、風が氷のように肌に冷たさをしみ込ませた。

ぼくたちが学校に到着すると、三々五々生徒たちが学校に登ってきた。ここでは文字通り登校してくるのだ。先生たちはぼくらを温かく迎えてくれ荷物を校舎に運び込む手伝いをしてくれた。

ぼくと蔵藤君は一段落すると練習をするためにギターのチューニングをした。しかしぼくのオカリーナの音と彼のギターの弦の音とはなかなか共鳴せず、集まってきた子供たちがガヤガヤしていたことも手伝ってぼくらは落ち着きを失い、思い余って一曲演奏を開始した。それは功を奏して子供たちのどぎもを抜いたかに見えたが、すぐに彼らはぼくらをなんだかんだとからかい始めた。どこの子供も同じだ。若い大人を率直にほめることはしないものだ。でもその中に親しい信頼関係がやがて芽生えはじめる。

夕食のカレーライス時にはみんな打ち解けて、ぼくのオカリーナは子供たちの手から口、口から手へと移っていった。厚着をしてても寒い寒いとぼくらは身震いしていたが、やがて子供たちと遊んでいるうちに汗をかき始めるのだった。

山の夜はしかし寒かった。床もスリッパも冷たい。靴下一枚では足は冷えたままだ。風はいつも窓をガタガタいわせ、子供たちの霜焼けの手はやけにみじめに見える。

ぼくら訪問団は子供たちと一緒に歌ったり、影絵の芝居をしてみせたり、ゲームを楽しんだり、フォークダンスをしたり、また子供たちに包帯の結び方を教えたりした。蔵藤君のギターと歌、そしてぼくのオカリーナでのフォークはとくに子供たちに評判よかった。

ぼくらは子供たちがまわりに集まって来ればくるほどうれしくなり、やりがいを感じるのだった。ぼくはオカリーナを首にぶら下げ子供たちを相手に話をした。しかし子供たちはどんな話をしても満足しないかのように、ちょうど雛鳥がくちばしを体よりもでっかく開いて親鳥から餌をもらおうとするように、ぼくに話を求めた。山間地の子供たちだからというのではなく、これは子供たちの共通したバイタリティーだ。

影絵の芝居はぼくらが長い間練習をしてきたものでその夜のメイン・イベントであった。ぼくは

照明を担当し、背景の光を、赤・青・黄・ピンクと変えてゆくのがだった。

ぼくは今の今まで、その夜起きたあることに関して蔵藤君に悪いことをしてしまったと思い続けている。彼はギターと歌が上手で、その夕べの進行係、すなわち司会者の役を委ねられていた。プログラムの合間に彼は歌を歌ったり、彼独特のユーモアで話をしたりするのであったが、ある短い映画の映写の準備のあいだぼくと彼は井上陽水の「いつのまにか少女は」を歌い奏でた。そして歌い終わったあと、まだ映画が始まりそうでなかったので、彼は続いてひとりで布施明の歌っていた「積木の家」を歌いだした。だが同時に映画フィルムのリールが回転を始め、電灯が消され映画もスタートされてしまった。彼の顔はスクリーンの前で強い映写光を受けて輝いた。彼の顔は、この光をまともに受けているためか、あるいはこの難曲をみごとに歌ってやろうとする気迫のせい、ゆがみ、ひきつっていた。彼の歌声と映画のナレーションがそれほど大きくもない講堂の中を不調和に響き、観衆はしばらくはあっけにとられてこの光景に見入った。映像はスクリーンに映し出されていたが、蔵藤君の顔面にもまばらな模様をさまざまに描きだし、まるで彼を化け物のように見せた。

ぼくは彼に注意してその場から退かせようとしたが、すでに思いを込めて歌っていた彼には伝えられなかった。この光景の中に自分を置くことの恥ずかしさに、ぼくはひとり退いた。子供たちはこの異様な光景に沈黙を守り続けていたが、村の青年団らしい人たちから野次のような声が発せられ始めた。「映画が見えないじゃないか！」

しかし蔵藤君は最後まで歌った。そしてぼくの後悔は、自分は観衆の方に逃げるように去り、彼をその光景の中の中心にそのまま最後まで放置していたことだ。

翌日の帰路、ぼくも彼もマイクロバスの方に乗り、彼はうつぶんを晴らそうとしているかのように道中自分の歌える曲をどんどんギターをかきならしながら歌い、リクエストにも応えた。宮崎に戻ったときには、声がめちゃくちゃに嘎れてしまっていた。

やがてマイクロバスが宮崎市内に入る頃に、彼はリクエストした女性たちが、リクエストしておきながら彼の歌を真剣に聞かず、おしゃべりばかりしていると憤慨してみせた。しかしその夕の反省会で再び披露された彼の嘎れ声を振り絞った歌が満場一致の喝采を受けたとき、彼の顔は輝き、彼の今回の旅行の苦労はすべて報われたようだった。彼は自分自身にとって貴重な青春の一ページを全力で綴り上げたのだ。

彼のあの樽尾での情熱はぼくにとっていい刺激であり、その後の励みにもなった。また他にも彼に関してはさまざまの青春ものの思い出があるが、彼のような人と若き日に交友関係を持つことができたのはぼくにとって幸いだった。彼はその後、茅ヶ崎の真空機器会社に勤めたのち、故郷山口に帰り、今県警に勤務している。

1979年

写真(photos):

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro